



文責 校長 山本 智文

子どもたちが輝いた小中合同運動会

5月27日(火)、絶好の運動会日和の中、「令和7年度小中合同運動会」が開催されました。5月24日(土)開催する予定でしたが、雨のため予備日の開催となりました。今年度は、「呉市消防団はしご隊」の方々に来ていただき演技を披露していただく予定としておりましたが、実現できなく残念でなりません。次年度は来ていただけるようすでに準備を始めたところです。平日開催にも関わらず、今年度も、来賓や地域・保護者の皆様にご観覧いただき、子どもたちに温かいご声援をいただきました。心よりお礼申し上げます。

今年度も蒲刈だからできる競技や表現等が満載の合同運動会となりました。来年度も工夫をこらし、**記憶に残る小中合同運動会**にしていきたいと考えています。ご協力いただいたPTAの皆様、ありがとうございました。

子どもたちは自分の力を精一杯発揮し、**一生懸命に頑張る姿**を見せてくれると共に、高学年の児童は、縁の下の力持ちとして、机や椅子ふき、係の仕事、片付け等の仕事に責任をもってやりとげてくれました。日々成長していく子どもたちに私たち教職員は今後もしっかりと寄り添い、一人一人を大切にした教育を展開していきます。今年度も我々教職員は、「**子どもの姿で勝負する**」を合言葉にさまざまなことにチャレンジしていきます。

今後も蒲刈小学校の子どもたちを、蒲刈小学校をよろしく願いいたします。

運動会の様子

大会スローガン



ともに仲良く
~Never give up~



自分の命は自分で守る！

第1回小中合同防災訓練(土砂災害)

5月16日(金)に、大雨が降り土砂災害が発生したことを想定して「第1回小中合同防災訓練」を行いました。まず、小学校の3階に垂直避難した後に、中学校体育館に移動し小中合同で地域毎に分かれ、ハザードマップを使って危険な場所や避難場所の確認をしました。中学生の「どこが危険な所か分かる？」等の声掛けに、小学生から「ここが危険だと思う。」「私の家の近くもやばい。」等の声があがっていました。今年度も「携帯マニュアル」を配付します。ご家族で避難経路及び避難場所等を話し合い記入し、常に携行させてください。



真市立〇〇小中学校

年 組 ()

自分の命は自分で守る

土砂災害対応

携帯マニュアル ver. 3

自然災害はいつ起こるかわかりません。万が一に備えてこのマニュアルをよく読み、携帯しましょう。また、大雨による災害から身を守るために大切なことは、「早めに避難すること」です。日ごろから、避難する場所や避難の仕方について家族と話し合しましょう。

—— 切れ目 — — — 山折り — — — 谷折り ——

小中学生が一堂に会して「防災学習」を実施することができるのが、蒲刈中学校区の良さだと考えています。子どもたち同士で学び合うことができる環境が整っています。



令和7年度「交通安全子供自転車広島県大会」に向けた練習

6月21日(土)に開催される「第60回交通安全子供自転車広島県大会」に向けて、5月の運動会が終了してから広警察署交通安全協会の方々及び下蒲刈駐在所 加計警部補さん、蒲刈駐在所 井上巡査部長さんのご指導のもと、5・6年生の代表の子どもたちが毎日放課後自転車に乗り、課題種目にチャレンジしています。

昨年度も、広警察署管内を代表して蒲刈小学校の子どもたちが大会に参加しました。そして、「第3位」という賞をいただきました。蒲刈小学校の名前が読み上げられた時、あまりの驚きに「やったー！」と大歓声があがりました。私も「よっしゃー！」と思わず声を荒げ、涙がこみ上げてきました。子どもたちの力って、本当に素晴らしいですね。素敵な瞬間を経験することができました。

今年も熱い闘いが始まります。「学科テスト」と「安全走行テスト」「技能走行テスト」で勝敗を競います。「頑張れー、蒲小健児。バストを尽くして記憶に残そう！」



子どもの心に寄り添う教師の“人間力” ～子どもの心を見失わない関係づくり～

1. 目の前の子どもとの人間関係をそのまま受け入れる..

人間関係に「方程式」はありません。しかし、そこに“マニュアル”を求めてしまうのは、生身の人間としての関わりは一筋縄ではいかないからです。つまり、教師と子どもとの関係もそうですが、自分の思い通りにすっきりといかないのが人間関係なのです。何とか割り切って対処していこうとしたり、自分の意見を譲ってしまったりすることが“敗北だ”、“個の喪失だ”ととらえていってしまうと、悩みは深まっていくばかりになってしまいます。まずは、目の前の子どもとの人間関係をありのまま一端受け入れていくことです。現実というものを否定してしまうと悩みは深まるばかりです。かつて、子育てに悩んでいる親を励ます声かけに、ことわざのような表現があったことを記憶しています。「**子育ては手間がかかるもの。手の焼けるもの**」。これは、子育てという人間関係に一息つけた人の振り返りの言葉です。それは、「『**人とは変わっていく存在**』で、**人間関係もとどまることがない(無常)から、決めつけてはいけませんよ**。」という“いたわりのメッセージ”だと思えるのです。だから、ちぐはぐな子育てですっきりといかなかったとしても、関わり続けていけばそれが「絆(信頼)」となっていくと勇気づけられたのでしょう。これらのことを頼りに信じ続けて再び子育てしていくと本当に変化していくのではないのでしょうか。

2. 人間関係を仕事とする教師の「魔法の言葉」とは..

とはいうものの、人間関係のプロと見られがちな教師は、まわりはそれほど思っていないなくても、本人は「そこに迷いがあってはならない」と気負いがちなものです。達観などでできそうにない自分であっても、不安いっぱいの等身大の自分を子どもや保護者にみせてはいけないと思込んでいる教師の存在があります。

※「達観」・・広く大きな見通しをもっていること。遠い将来の情勢を見通すこと。

ただ、社会が求める役割の一つとして、教師はそのような建て前を担っていると思えばそれはそれで割り切れるかもしれません。しかし、それほど器用に切り替えることができないのが人間の心なのではないのでしょうか。そうだとすると、関係づくりのメインとなりがちな言葉の中に、「**相手の心をつかむ“魔法の言葉”**」はないものかと探したくなります。暗示にかけるような目的でもなければ、日々の人間関係に“魔法”などかけてよいわけではないと分かっている、関係づくりに迷い苦しんでいなければあてにならない納期を待っている余裕などありません。そこで、「言葉」が「魔法・魔術」になるということはどういうことなのでしょう。

「**教師の言葉がけ**」がどのような魔法のかけ方になるかは、すべてお互いの関係性によって決まるのではないかと考えています。担任と子どもたちとの「息づかい」のかけ合いがポ



イントになります。つまり、「魔法」とは、呪文のようなものではなく、「**信頼**」だと思のです。信頼を寄せるから、魔法にかかるのではないのでしょうか。だとしたら、心さまよう子どもが担任の魔法にかかりやすいようになるためには、担任が、子どもたちから「**信頼される人間観**」をもち、「**発信していく関わり**」が必要となってきます。まさに、「**甘える勇気こそ人間力**」なのではないのでしょうか。人は、時に無力な存在となります。その時、否定されるリスクを抱えながらも人を信じて「**素の自分**」をさらけ出し、相手の懐に一途に飛び込んでいく…。まるで、赤ちゃんが腹這いながら親のもとに駆け込む姿であり、何度叱られても母親のエプロンの端をしっかりとつかんで「**おかあさん、おかあさん**」とすがりつく、あのいじらしき光景です。人を信じるといふ心は、自分が無力な存在であった幼き頃育てられているのです。だから、教師も、自分が無力になった時は、その「**子どもの心**」を見失うことなく取り戻して、子どもの懐に飛び込む関係づくりが大切だと思のです。そして、子どももその教師の人間力に触れることで、自らの「**子どもの心**」を掘り起こし、今に至る成長をかみしめることができるものと考えます。

3. 謙虚に甘える勇気こそ人間力..

「子育ての最後は親の死に際」ということわざがありますが、子どもは親や教師への信頼をどこで決定しているのか、ということ。土壇場の人間関係を背負った時と、このことわざは教えてくれています。それは、格好よく自分を見せたり、とりつくろったりして無理やりまとめるということではなく、「**弱い自分**」もしっかりと子どもたちに見せつつも現実と向き合っている「**素の姿**」です。だから、困った時は、素直に子どもに「**助けてね**」と甘える勇気を見せていくことも必要であると思っています。そして、甘えるには、「**相手を信じる勇気**」がいるから、子どもはそこから信じ返していく力をもらえると思のです。

かんきつ栽培の学び ~原田敏信さんから学ぶ~

5月28日(水)に、3~6年生が総合的な学習の時間に下蒲刈町下島在住の「**原田敏信さん**」をゲストティーチャーとしてお招きし、「**かんきつ栽培**」のことについて学ぶ時間をいただきました。

原田さんは、現在、下蒲刈町の連合会長をされており、退職してから本格的にかんきつの栽培に取り組み始めました。私の大先輩でもあり、毎年、「盆踊り」「祭り」の開催に向け、地元の行事をどうやって盛り上げていくか知恵をしばって取り組んでいるところ。です。

子どもたちの多くの質問に対して、一つ一つ丁寧に答えていただきました。私も父親を亡くして以来、母親とかんきつの栽培に取り組んでいますが、一年中手間がかかります。手間をかけないと秋の収穫の際に喜びを味わうことはできないのです。食べるのは一瞬ですが、そこにたどり着くためには様々な努力を積み重ねていかなければならないのです。

今回は、現地での学習ではなく、教室での学びとなりましたが、できれば秋の収穫の体験をさせてやりたいと考えています。大変お忙しい中、子どもたちの学びのために本校におこしいただいた原田さんに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

